

月刊 **みんぱく** 10月号

2025

特集

無限！台湾原住民アート



巻頭エッセイ
丸屋 九兵衛

我がMACHI、台湾のこと

丸屋 九兵衛

万物評論家

プロフィール
京都市伏見区出身。早稲田大学卒業後、やや「ストリート」な仕事を経て音楽雑誌編集部勤務。ジョージ・クリントン御大のトークの相方を二度にわたって務めるといふ奇跡を経て勢いづき、今は「万物評論家」として語る日々。ちなみに表題のMachiとは、英語のmatchから派生し、友人・仲間・団結を意味する台湾独特の表現。

わ

たしがその本を出したのは二〇一四年一月だからずいぶん前だ。タイトル『史上最強の台北カオスガイド101』は営業販促会議で決まったものだが、全く不要な英題『Old Nerdly Bastard Goes to Taipei』と中文題『通天宅男之台北城市』も著者権限でつけた。これは原題・英題・邦題が必ず合致しない中華圏映画の伝統（賛先生與找錢華＝Warriors Two＝燃えよデブゴン10／友情拳、等）を踏まえてのこだわり。それを含めて同書は、中華圏・台湾・台北に宛てた二〇〇頁近い恋文のようなものだ。

初めて台北を訪れたのは二〇〇八年二月。やがて取材等の名目で何度も行くようになり、ディーン・フジオカという男と知り合うに至るのは二〇一二年だったか。共通の友人であるDJ Noodez（麵麵）と食事した後、三人で原住民レゲエ・バンドのNoddy（ヌードリー）の公演に行ったこともある。わたしは終演後にNoddyの面々から「うちのメンバーかと思つた」と言われ（顔面の系統が近い？）、「俺たち原住民だから」と吹き矢ごっこに誘われる……彼らへの偏見を笑いのめす試みだろうが、部外者たるわたしは反応に困る。そのまま連れられて原住民御用達バーへ。「東海岸の原住民が台北に来て集えるように」と張恵妹（阿妹）が構えた店、と聞いた。「台湾ヒップホップ界の菩薩」と異名をとるラッ

パー「大支」と知り合い、台湾南部の台南や高雄を歩くようになったのも同じ頃。大支の盟友で、のちに議員となるフレディ・リム（メタル・バンド「Chthonic」のシンガー）とやりとりを始めたのは少し後だったと思う。

台湾の出自・地域・文化・言語・政治的な多様性をより強く意識し始めたのは、この前後だった。原住民たちの多くが国民党支持であること、大陸から離れた台湾の象徴とも見える鄭成功（一六二四～一六六二年）も今や手放しでは称賛できないこと、DJ Noodezのように「客家語を話せない客家」も存在すること、等々。

一九四五年以降に中国大陸から来た外省人（いわば外様・台湾人）の処遇に関するフレディ・リムの提案を巡って論争に巻き込まれたこともある。その時に助けてくれた外省人は台湾海軍の提督の息子だが、信用ならないラッパー。でも、用心さえ忘れなければ楽しい友人ではある。ああそうだ、ジャッキー・チェンの息子にマリファナを渡したのもたぶん彼だ。ところで、件の自著。版元が出版業から撤退したこともあり、現在は入手はば不可だ。もともと一〇年以上経てば旅行ガイドの用はなさないだろうが、そもそも我が著書なので真つ当なガイド本なわけがない。

月刊
みんな
2025年10月号

表紙
イタン・バヴァヴァルン
《我思想 我悠遊 我自在》
2019年、182×62センチメートル(2枚組)
風に揺れる百合のように、海を泳ぐ魚のように——わたしの思考もまた、自由に、自在にめぐる。

*本文中、撮影者・提供者を記載していない写真は執筆者の撮影・提供によるものです。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

- 1 巻頭エッセイ
我がMACHI、台湾のこと
丸屋 九兵衛

特集 無限!台湾原住民アート

- 3 原住民アートへの世界的熱視線
野林 厚志
- 5 描かれた「本来」の住民たち
羽田 ジェシカ
- 8 現代台湾原住民アートの行方
黄 海鳴
- 10 境界をこえる織物
田本 はる菜
- 12 みんなく回覧板

- 14 推しコレ図鑑
ブータンの木椀、ポップ
宮本 万里
- 16 もっと、みんなく
手話通訳てんやわんや
平 英司
- 17 世界の「乗っちゃえ!」
おしゃべりバスは行く
福井 栄二郎
- 18 だって調査だもの
わたして調査しているのか
マーク・ウィンチェスター
- 20 ばくっ!とフィルめし
テヘランでラーメンロスを克服!?
谷 憲一
- 21 今月号の地図・編集後記



イタン・パヴァヴァルン《聆聴(左)》2024年
わたしたちは常に自然の声に耳を傾けなければならない。左の耳と右の耳で。
自然界の声はわたしたちに語りかける。傲慢になりすぎないようにと



イタン・パヴァヴァルン《聆聴(右)》2024年



ミレイ・マヴァリウ《16族のトーテム》2013～2022年より
《ブユマ族》(左上)、《サイシャット族》(右下)



アダン・ダルジャルン《禁錮》2019年



アダン・ダルジャルン《ungalji的綻放》2019年

特集 無限!台湾 原住民アート

ポルトガル人が「フォルモサ(麗しき島)」とよぶ前から
原住民たちはこの台湾に歴史と文化を刻んできた。
今、彼らのアートが熱い!
マイノリティ芸術なんて枠内ではない。
伝統も、創造も、躍進も、台湾のすべてが込められている。
ようこそ、原住民アートの世界へ!

企画展
フォルモサ∞アート——台湾の原住民藝術の現在

会期: 2025年9月18日(木)～12月16日(火)
場所: 国立民族学博物館 本館2階企画展示場

原住民アートへの世界的熱視線

野林 厚志
のばやしあつし
民博教授

然、祖霊や神話、祭礼や慣用されてきた紋
様などが描かれ、伝統の継承が強く意識さ
れる。

アートは日常のなかに

芸(藝)術やアートという抽象的な文化

「當代台湾原住民藝術」とは
台湾には総人口の約二パーセントにあた
る六十一万人あまりの先住民が存在する。
彼らはもともと住人という意味の「原住
民族」とよばれている。近年、「當代台湾
原住民藝術」、訳せば現代台湾原住民ア
ート(以下、原住民アート)は、台湾だけ
なく国際的なアートシーンでも注目されて
いる。

原住民アートの特徴は、個人や集団の記
憶が民族のアイデンティティをともなっ
て作品に色濃くあらわれることである。制
作者の記憶や考えだけでなく、集落や民族
ごとに伝えられてきた昔の記憶や世界観も
見てとれる。少数者であり続けた原住民族
はそれぞれの時代において差別や抑圧を受
けてきた。したがって、ときには政治権力
や社会的な差別に対する強い抗議や社会運
動の色彩を帯びる作品もある。同時に、自



アダン・ダルジャルン氏の工房を訪ねる(台湾 屏東県、2025年)



アルツァン・パタダ《歲月》2024年

文化や行為とむすびついてきた。

現在、原住民族の人たちは「藝術」という中国語を普通に使うが、母語で芸術や芸術家を表現する際は借用や既存の語彙を組み合わせて使う。例えば、タイヤル語では、*manak ngayun*（特別に見る）、パイワン語では *pulima*（手先が器用な人、手先が器用なこと）といった具合である。

概念は、西洋近代の文化の受容とともに台湾で定着した。一方、原住民族にとって芸術的な表現は日常生活や儀礼のなかに物質

原住民族による創作は、日本統治時代（一八九五～一九四五年）には民族学の標本や工芸品として扱われ、中華民国初期（一九四六～七〇年ころ）には周縁化された存在であった。原住民族の創作活動が新たな

かたちを取り始めるのは一九八〇年代末から一九九〇年代初頭である。

複合的メディアへも

原住民族に対する政治的、経済的差別の構造が改善されるにつれ、原住民族の高等教育への進学率もあがり、西洋の芸術の概念や技術を学び、新たな手法やモチーフで自身の文化を表現し始めた。従来の伝統文化と新たに取込んだ芸術とのあいだで創作を進め、先住民族としての芸術である原住民族アートという分野が確立していった。

アルアイ・カウマカン《石垣》2025年 災害後の村をよみがえらせる。石垣は生命の呼吸、血脈の流動。忘れられたものを再び記憶していく

〈アルアイ・カウマカンからのメッセージ〉 わたしはわたしの想いを探しています。わたしの心。わたしの涙。わたしの手。わたしの村落。わたしの魂。わたしの絆。わたしたちは永遠にひとつ



上:アルツァン・パタダ氏の工房「百歩蛇の天空工作室」
下:アルアイ・カウマカン氏の工房の棚には色とりどりの刺繍糸や毛糸が並ぶ（どちらも台湾 屏東県、2025年）

台湾は一九八七年に長期にわたる戒厳状態を終了し民主化が進んだ。原住民族の先住民族としてのアイデンティティも強くなった。そのなかでは文化復興が重要な課題となり、慣習的なものづくり、歌唱や舞踊の継承に取

像、インスタレーションのような複合的メディアへと多様化している。

現在、原住民族アートは台湾のなかだけで

なく、ヴェネツィア・ビエンナーレやアジア・パシフィック・トリエンナーレ（APT）などの出展をとおして、国際的な認知度も

高い。先住民族の芸術をとおして台湾が世界とつながる重要な役割を担っている。

描かれた「本来」の住民たち

羽田 ジェシカ 福岡大学 非常勤講師

「山の住民」への切なる憧れ

台湾原住民族を描いた画家といえば、まず塩月桃甫（二八八六～一九五四年）と顔

水龍（一九〇三～一九七七年）の名が挙がる。宮崎県出身の塩月は一九二一年に台湾へ渡り、一九四六年の引き揚げまで台湾の芸術界を牽引したひとりである。一方、台南生

まれの顔は、画家・デザイナーとして活動し、台湾固有の工芸の保全と発展に尽くした。ふたりは原住民族のもとをたびたび訪れていた。台湾在住中の塩月は、原住民族について「純朴なる彼らを訪れることは、父の家に帰るような心もちである」と記している。日本の敗戦で台湾から引き揚げた後も、自身が長く台湾にとどまった理由について、「山の住民がいたからだ」と振り返っている。他方で、顔は「原住民族とともに生活することに切なる憧れがある」と明かし、原住民族を繰り返し描いた理由については「台湾は本来原住民族の地である」と説明した。

人類の深き、強き内なる母性

塩月は原住民族の文化、置かれた状況に強い関心をもっていた。霧社事件を悼み、一九三二年に《母》を台湾美術展覧会に出品した。霧社事件とは、一九三〇年に霧社のセデック族が日本の厳しい支配に反発し



図1 塩月桃甫《母》1932年（現存せず）
第6回台湾美術展覧会出品
出典：台湾美術展覧会データベース https://ndweb.iis.sinica.edu.tw/twart/System/database_TE/04te_search/index.jsp



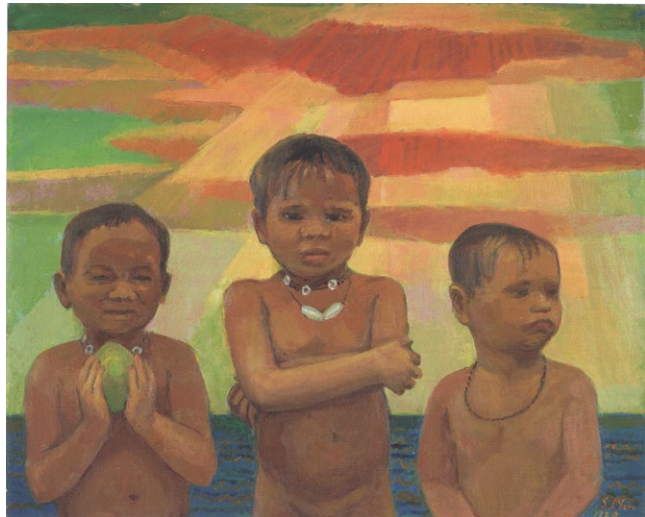


図5 顔水龍《ヤミ族の子供》1982年（個人蔵）
油彩、画布、65.5×80センチメートル
出典：『走進公眾美化台灣：顔水龍（住民とともに、台湾を美しく——顔水龍）』図録（台北市立美術館、2012年）

図6 顔水龍《蘭嶼所見》1982年（個人蔵）
油彩、画布、72.5×91センチメートル
出典：『走進公眾美化台灣：顔水龍（住民とともに、台湾を美しく——顔水龍）』図録（台北市立美術館、2012年）



を建設したことに抗議し、『ヤミ族の子供』を描いた。三人のタオ族の子どもをとおして、戸惑いと怒りそして希望が表現されている（図5）。さらに、美しい故郷でタオ族が代々暮らし続けられることを願い、夕日の海辺にたたずむ家族の姿を『蘭嶼所見』に描き込んだ（図6）。

彼らの視点から描き続けた。時代に翻弄される原住民と、社会的・歴史的な問題に向き合いながら制作された作品には、切なさや漂い、心に残る。



図2 塩月桃甫《口笛を吹く少女》1924年（宮崎県立美術館蔵）
油彩、畫布、60.6×45.0センチメートル、写真提供：宮崎県立美術館
口笛とはタイヤル族の口琴のこと



図3 塩月桃甫《刺繡》1930年代（個人蔵）
油彩、板、35.0×24.0センチメートル
出典：『不朽の青春——台湾美術再発見』図録（台北教育大学北師美術館、2020年）

て日本人を襲撃し、これに対して日本は軍隊を投入して激しく弾圧した一連の事件である。その作品は現存しないが、写真は図録に収められ、新聞にも詳細な記述がある。縦長の画面には、砲弾の炸裂による火煙が

美しい故郷で暮らし続ける願い

立ちこめる中、怯える子どもたちを毅然と守る母親の姿が描かれている。当時、「人類の深き、強き内なる母性」を表現した芸術として高く評価された（図1）。一方、実際に彼らを訪れた際に描きとめた『ロボを吹く少女』や『刺繡』のように、彼らの平穏な日常の一場面をとらえた作品もある（図2、図3）。

顔による日本統治時代の原住民を主題とした作品として、一九三六年の台湾美術展覧会図録に斜め向きの肖像様式で描かれたルカイ族の女性像が収録されている（図4-1）。この作品は失われたが、顔は戦後も原住民女性をこの角度であらわした作品をたびたび手がけており、一九五八年の『パイワンの少女』はその一例である（図4-2）。顔は、女性たちを高く表現するために、あえて、西洋ルネサンス時代に高貴な女性を描く際に用いられた肖像画の形式を取り入



図4-1 顔水龍《大南社の娘》1936年（現存せず）
第10回台湾美術展覧会出品
出典：台湾美術展覧会データベース
https://ndweb.iis.sinica.edu.tw/twart/System/database-TE/04te_search/index.jsp

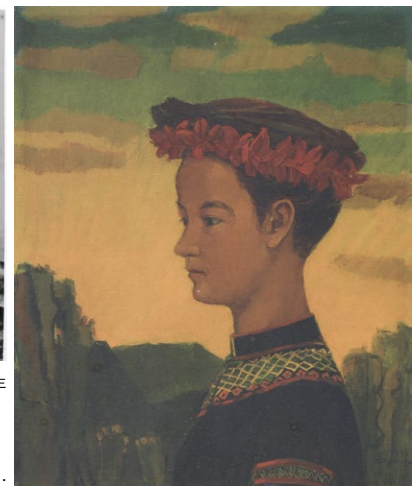


図4-2 顔水龍《パイワンの少女》1958年（個人蔵）
72.5×60センチメートル
出典：『走進公眾美化台灣：顔水龍（住民とともに、台湾を美しく——顔水龍）』図録（台北市立美術館、2012年）

れている。その生活環境が統治者側による開発で破壊されつつあった原住民族に対し、顔は同じ目線に立ち、友人関係を築いた。台中市にあった自宅は、原住民族が街に出る際に立ち寄り泊まれる場所となり、図中の少女も訪れた友人のひとりである。また一九八二年、タオ（ヤミ）族の暮らす蘭嶼に電力会社が放射性廃棄物貯蔵施設

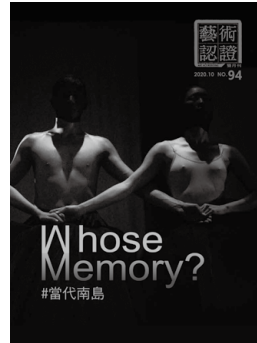
現代台湾原住民アートの行方

ホアン ハイミン
黄 海 鳴
キュレーター、芸術評論家

クロスオーバーする 現代美術と原住民アート

近年、台湾原住民による現代アートがアツい！その最初のきっかけを作ったのが文化芸術の研究者であり美術家の潘小雪であった。原住民社会の人びとと深く対話し、原住民アートと首都台北を中心とする現代アートの対等な交流を促す実験的な取り組みを推進し続けてきた。その結果、台北現代美術館館長の時代に、花蓮の原住民アーティストを台北のアートシーンに招き入れることに成功した。

次の功労者は李俊賢である。二〇〇五年、李俊賢は高雄市立美術館館長に就任すると、隔月刊誌『藝術認證』を創刊した。総勢五〇名を超える原住民



『藝術認證』第94号特集「Whose Memory? 當代南島」
(高雄市立美術館、2020年)

「南島語族」すなわち原住民のアートを促進し、その老化、消費化、標準化を防ぐことが含まれている。高雄市立美術館の設立と活動が原住民アートへの関心をよび起こした。



「未來潮——大山地門當代藝術展」展示風景
(台湾 屏東県・屏東美術館、2020年)

原住民アートをキュレーションする

二〇二〇年、キュレーターであり芸術評論家の徐文瑞とパイワン族の芸術家イタン・パヴァヴァルンが企画した「未來潮——大山地門當代藝術展」が屏東美術館で開催された。原住民が暮らす山岳地帯の大山地門には、原住民文化の保存と展示を目的とした台湾原住民族文化園区がある。

すなわち原住民アート実践の地である。展覧会の準備期間中に、国立台北芸術大学の学生たちが大山地門の原住民アーティストのもとでのフィールド調査をおとして相互理解を深め、キュレーション活動をおこなった。原住民アーティストたちによつ

て、いくつものアート作品が生み出された。これらの作品が美術館に収蔵され、ハワイトキューブ空間に展示されると、必然的に西洋的な美術史の方法論に基づいてアーカイブ化のプロセスを辿ることになる。この展覧会は、二〇世紀初頭から現在にいたる大山地門における原住民のアート実践を整理し、振り返るものであった。しかし、原住民アートの意義を伝えるにはまだ十分とはいえない。

「原郷」でアートが生き返る

二〇二四年、イタン・パヴァヴァルンが企画した『cemikel 迴返』Kacalisian 藝術村部落・駐村藝術家聯展が屏東県大社で開催された。パイワン族が暮らした大社集落は二〇〇九年の台風により壊滅的な被害（八八水害）を受けた場所で、その後、集落全体での移住を余儀なくされた。

展覧会に先立って、台湾内外のアーティストが新しい移住先の礼納里と「原郷」である大社に滞在して創作活動をする、四〇日間のアーティスト・イン・レジデンスをおこなった。

原住民アーティストを招待して一緒に大社に戻り、ともに作品を創作した。「原郷」の地で再び物語と記憶を創造したのだ。

開催期間中は大社集落全体が会場とな



陳亮(チェン・リャン)《起點》2024年
『cemikel 迴返』Kacalisian 藝術村部落・駐村藝術家聯展

り、いたるところにアート作品が展示された。アーティストによるワークショップやガイドツアーも開催され、集落の墓地や頁岩によつて埋まりかけている山谷の溪流にも足を踏み入れた。かつての水害で被害を受けた集落のなかを歩き来しながら、これまでに見たさまざまな作品が生き返ったかのようを感じた。原住民アートには、「原郷」とのより強い結びつきが必要なのである。

(訳・野林厚志)

境界をこえる織物

たもと
田本 はるな
成城大学 専任講師

工芸か？ 芸術か？

「工芸」と「芸術」には、しばしば対照的なイメージがつきまとう。工芸が地方の無名の人びとが受け継いできた技をイメージさせるなら、芸術はどこか、卓越した才能

をもつ個人の表現行為という感じがする。また芸術作品が実用性や機能から自由である一方、工芸品は「用の美」といわれるように、使うことから切り離せないものとされがちである。とすれば、台湾先住民の織物は芸術よりも工芸と見るべきだろうか？



対称的な菱形の反復に見えるが細部の模様が異なる織物
林喜美氏制作(台湾 南投県、2025年、林喜美撮影)

世界へとびだす織り手

一九九〇年代以降、台湾が国家として先住民文化の尊重を掲げるようになると、政府認定の「工芸師」として活躍する人びとがあらわれてきた。「匿名の作り手」による工芸というイメージと異なり、先住民の人びとは自身の工房を持ち、「名のある作り手」として織りにたずさわり始めたのである。

こうした織り手たちは、集落の年配者から技を継承するだけでなく、国内外の博物館を訪ねて積極的に情報収集をしている。

伝統の即興性、独創性

例えば先住民セデックの人びとは、二〇二二年にスウェーデンの世界文化博物館を訪れて収蔵品の調査をおこない、閲覧した自民族の民族衣装を複製する計画に参画した。同行したセデックのある女性は、今では世界各地の博物館が公開する収蔵品画像などにスマートフォンでアクセスし、制作のための情報を得ているという。自民族の図案や技法を学ぶ場は今や地域だけでなく、各国の博物館やオンライン上のネットワークへも広がっているのだ。

じつは今年三月には、わたしも案内役を引き受け、先住民セデックとタイヤルの織り手とともに国立民族学博物館、天理大学附属天理参考館で収蔵品調査をおこなうことができた。興味深いのは、古めかしい織物と対面した織り手たちが、そこに決まったデザインや技法の反復よりも、即興性や独創性を見つけたにしていることだ。工芸師のウマ・ペリン（漢語名・林喜美）さんが教えてくれたのは、同じ菱形模様に見える布でも、よく見ると細部が少しずつ違うことである。それはそのときどきの織り手の



国立民族学博物館での収蔵品調査の様子(大阪府、2025年)

たしかに、織物は先住民という人びとを知るための学術資料であつたし、また一部の目利きはそれを「民衆的工芸」とよんだ。今日の台湾でも、先住民の織物が「手工芸」とよばれることがある。しかし、台湾先住民の人びとの織りの現場を訪ねてみると、先に述べた工芸と芸術の区別が意味をなさないように感じることもある。



手織布を用いた衣装デザイン。林喜美氏制作(台湾 南投県、2025年、林喜美撮影)

心情や集中の度合いによるもので、「織り上がってみないと、どんな布になるかわからない」のだという。

こう語る彼女は、セデックの伝統織物技術の「保存者」として制作にあたりながら、手織物を用いた新たな服飾デザインを模索している。こうして台湾先住民の織り手たちは、わたしたちが想定する工芸と芸術の境界を、やすやすとこえていくのである。

みんなく 回覧板

イベントの詳細・予約はこちら

みんなくホームページ
催し物のご案内
<https://www.minpaku.ac.jp/event/>



各イベントについて、
詳しくはホームページを
ご覧ください。

特別展

舟と人類

——アジア・オセアニアの海の暮らし

会期 12月9日(火)まで
会場 特別展示館



■関連イベント
ワークショップ
**アウトリガーカヌー模型を
作って帆走させよう！**
日時 10月11日(土)13時～15時30分
会場 本館2階第5セミナー室、
特別展示館ほか
講師 小野林太郎(本館 教授)、みん
ぱくミュージアムパートナーズ
定員 12名

【申込期間】 10月7日(火)まで

※事前申込制、イベント参加費は不要、
一般、大学生の参加者は要特別展
示観覧券

※詳細は二次元コード
(QR)からご確認ください。



ワークショップ
**インドネシア・マドゥラ島の
舟模型を工作しよう！**
日時 10月12日(日)①10時30分～13
時②14時～16時30分
会場 本館2階第5セミナー室、
特別展示館ほか
講師 小野林太郎(本館 教授)
ジャカルタ海洋博物館スタッフ
定員 各回15名

【申込期間】 10月7日(火)まで

※事前申込制、イベント参加費は不要、
一般、大学生の参加者は要特別展
示観覧券

※詳細は二次元コード
(QR)からご確認ください。



ワークショップ 海の暮らしとバスケットリー ——月桃ガシナーづくり

日時 11月1日(土)、11月2日(日)
13時～16時受付開始12時30分
会場 本館1階エントランスホール、
特別展示館

講師 小野林太郎(本館 教授)
指導 池原美智子(石垣島やちむん
館工房 館長、石塚輝美 同ス
タッフ)

定員 各回10名
対象 小学5年生以上推奨、小学4
年生以下の参加者は要保護者
同伴

参加費 500円(一般、大学生の参
加者は要特別展示観覧券)
持ち物 汚れてもよい服装、タオル

【申込期間】 10月8日(水)まで

※事前申込制(抽選ののち、10月17日
(金)までに抽選結果を通知)。1回
につき1名の応募が可能

ワークショップ
**エアドームによる星の航海
——オセアニアの伝統航海**
※一部日時が変更になりました。

日時 11月8日(土)、11月9日(日)、
12月6日(土)、12月7日(日)
①11時～12時②13時～14時
③15時～16時
会場 本館1階エントランスホール、
本館2階セミナー室
講師 小野林太郎(本館 教授)
後藤明(喜界島サンゴ礁科学
研究所・学術顧問)

定員 各回20名

※事前申込制、イベント参加費は不要

ワークショップ
**縄文さんと石斧で丸木舟を
つくる**
コース① 2時間のコースです。
小型丸木舟の製作を体験します。

日時 11月15日(土)、11月16日(日)、
11月22日(土)、11月23日(日)祝

【申込期間】

▼友の会先行受付

①10時30分～12時30分
②14時～16時※各日2部入替制
【コース②】 2日間のコースです。
1日目(土)は石斧づくり体験、2日
目(日)は製作した石斧を用いて櫓(か
いづり)をおこないます。

日時 11月29日(土)10時30分～16時
11月30日(日)10時30分～15時
【コース①、コース②共通】
会場 特別展示館地下休憩所
講師 南宮国広(縄文大工)
馬淵香(アシスタント)

定員 各回15名

※事前申込制、イベント参加費は不要

みんなく映画会
「チエチエメ二号の冒険」
本館がオセアニア展示場にて1977
年より展示しているミクロネシアの航
海カヌー「チエチエメ二号」が1975
年に沖縄で開催された海洋博へ航海
した際の記録映画「チエチエメ二号の
冒険」を解説を交えて上映します。

日時 11月29日(土)13時30分～16時
15分(開場12時30分)
会場 みんなくインテリジェントホー
ル(講堂)

定員 350名

上映作品 「チエチエメ二号の冒険」
(1976年)
参加費 要展示観覧券(一般780円、
特別展をご覧ください)は一般は一
般1200円)

※イベント参加費は不要

解説 門田修(映像作家)、林和代(サ
タワリ島航海体験者)

司会 小野林太郎(本館 教授)

※事前申込制(本人を含む2名まで)、
先着順
※事前申込の方へ、当日12時30分
から本館2階会場前にて展示観覧券
を確認後、入場していただきます。
※受付期間中に定員に満たない場合
のみ当日参加を受け付けます。

【申込期間】



友の会

講演会・セミナーへのお申し込みは友の会ホームページ内の受付フォームをご利用ください。

お問い合わせ先

国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)

電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く)

E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

FAX 06-6878-3716

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

友の会講演会

参加形式：会場もしくはオンライン配信

友の会会員：無料

一般(会場参加のみ)：500円

※事前申込制、先着順

※会員は会場参加の場合、事前申込不要

第565回 10月4日(土)13時30分～15時
海を越えた人類の移住と舟
——**海域アジア・オセアニアの事例から**

講師 小野林太郎(本館 教授)

会場 本館2階第5セミナー室(定員70名)

第566回 11月1日(土)13時30分～15時
ジェンダーから考える
イタリアの地域社会

講師 宇田川妙子(本館 名誉教授)

会場 本館2階第5セミナー室(定員70名)

イタリアはしばしば男女の役割分担が固定的
で男性中心主義的な社会であると言われま
す。しかし実態はもう少し複雑です。ローマ
近郊の町の暮らしをジェンダーという視点か
ら見直してみると、その事例を日本社会と
も比較しながら、そもそもジェンダーとは
何か、という問いについてもあらためて考
えてみましょう。

東京講演会

友の会会員：無料、一般：500円

※事前申込制、先着順

※オンライン配信はありません。

第141回 11月2日(日)13時30分～15時

**「原住民藝術家」として
語る／語らない人びと**

講師 田本はる菜(成城大学 専任講師)

会場 モンベル御徒町店4階サロン

(定員50名)

協賛 株式会社モンベル

「原住民藝術(家)」というフレームは、作品
を理解する拠り所になる一方で、ときには足
かせになることもあります。「私をただ『藝術
家』と呼んでほしい、『原住民』という3文字を
被せないでほしい」という、拉黒子・達立夫
(ラヘズ・タリフ、台湾原住民のアーティスト)
の言葉を手がかりに、台湾原住民の工
藝・藝術にいかに接近できるのかを探ります。

とがいかにかにあることができるの
かを考えます。
日時 10月31日(金)18時30分～20時
40分(開場17時30分)
会場 日経ホール(東京)
定員 600名

趣旨説明 奈良雅史(本館 准教授)
講演1 奈良雅史(本館 准教授)
講演2 藤野陽平(慶應義塾大学 教授)
パネルディスカッション
藤野陽平×島村一平(本館 教授)
×奈良雅史
主催 国立民族学博物館、
日本経済新聞社
【申込期間】 10月22日(水)まで

みんなくゼミナール

会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)
参加無料、申込不要(定員400名)

第561回

10月18日(土)13時30分～15時(開場13時)

台湾原住民アート史

講師 野林厚志(本館 教授)

第562回

11月15日(土)13時30分～15時(開場13時)

浮かぶ、走る、閉じこめる

——**乗りものとしての舟、船舶**

講師 飯田卓(本館 教授)

舟のはたらきは、器(うつわ)に似ています。
舟とは、人が乗れるほど大きな器です。しか
し舟には、その他の工夫もほどこされていま
す。写真を見ながら、舟とはなにかを考えて
みましょう。



佐渡のたらい舟(H0005708、門田修[海工房]撮影)

みんなくウィークエンド・ サロン——研究者と話そう

会場 本館展示場(ナビひろば)

※定員なし(ご自由に参加いただけます)

※申込不要、要展示観覧券(一般780円、

特別展をご覧ください)は一般1200円)

※イベント参加費は不要

10月5日(日)14時30分～15時30分

古代日本の舟とその特徴

——**船形埴輪と出土船材からの検討**

話者 小野林太郎(本館 教授)

宮原千波(総研大 博士後期課程／

日本学術振興会 特別研究員DC1)

10月19日(日)14時30分～15時00分

FF(フォルモサ・ファンタジー)2025

——**台湾原住民の世界観**

話者 野林厚志(本館 教授)

台湾の原住民芸術は、個人の記憶や民族
としての歴史を表現する重要な手段であり、
作品には自然や祖霊との深いつながり、植民
地的支配によって受けた苦しみや抵抗の思

国立民族学博物館 広報係

電話 06-6878-8560 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6875-0401

お問い合わせフォーム <https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form/>

椀

標本番号 | H0029660

地域 | ブータン

展示場 | 非公開

サイズ | 幅10cm×奥行10cm×高さ4cm

重さ | 35g



✦ 推しコレポイント ✦

浅いカップに見えるが、容量は結構ある。使用後は下唇や指、布で残った水分を拭うだけ。外はよく磨かれていてツルツル。内側にコーティングがあると水漏れしにくい。



ブータンで愛用していたMyポップ(2025年)



ブータンの木椀、ポップ

みやもと まり
宮本 万里

慶應義塾大学 教授

民族衣装の懷から

初めてのブータンでの長期調査に向かったとき、寝袋と食糧、ノートやカメラの入った大型リュックに忍ばせたのは、こぶし大の木製の小さな椀^{わん}、ポップであった。それは、前合わせの上着の懷に、財布やドマとよばれる「キンマ^か噛み」の嗜好品^{しこうひん}一式、布きれ、懷中電灯、携帯電話やペンなどの生活必需品と一緒に収納される類のものであり、茶や酒を注ぐカップとして、また食事の際のおかず用の小皿としても使われてきた。

元々持ち物の多くないブータンの人びとだが、このポップの素材や質には皆一言あるようで、瘤空^{こぶく}製、内側を銀でコーティングしたもの、象牙が使われたものなどがポケットから出てくると、皆がちらりと見てはそれぞれ品定めをする。

ホストファミリーのお母さんは、銀で内張りされた小ぶりの椀をいつも民族服の合わせに入れており、皆の前でそのポップを取り出す彼女は少し誇らしげに見えた。一方でお父さんは雅な椀^{みやび}などどうでもいい様子で、注がれる液体に目を注いでいた。仏教僧にとっても木椀は長いあいだ必需品で、黒漆で内側を塗ったものは特に「僧侶の椀」とよばれてきたが、現在は仏教僧院でもプラスチックの椀や皿が席卷し、台所には水と洗剤で洗われた食器が山と積みあげられている。

酒をすすめられると、おもむろに……

わたしの愛用品は、ふらりと入った首都の小さな工芸品売り場で買ったもので、高級と評価される類のものではなく、実際に目利きを自認する友人たちに特に褒められた記憶もない。けれども、瘤空風のまだら模様が少し浮き出た赤茶色で、軽くて薄く、スベスベと手触りがよいこのポップがわたしは結構気に入っていた。村を訪ねる際には上着のポケットやウエストポーチにこれを忍ばせ、村人が通りすがりや祭りの休憩時間に自家製酒入りの大きなボトルを持って近づいてくると、おもむろに自分のポップを取り出しそれを受けるのが密かな楽しみとなった。

しかし、木椀を懷に忍ばせる文化も徐々に廃れつつある。村人がプラスチックの客用食器を持ち始めると、わたしのポップの出番もぐんと減ってしまった。けれども、それは日本のわたしの研究室の棚の上でブータンの山間の村の賑やかな酒盛りの風景をいつも思い出させてくれる。



最近是中国製のプラスチックの椀が常用されている
(ブータン、2008年)

手話通訳てんやわんや

たいら えい じ
平 英 司

民博 プロジェクト研究員

視線や眉の動き、うなずきも

みんぱくでは、子ども向けのワークショップから一般向けの講演会、はたまた研究者の集まりまで、公開イベントがじつに多い。それに合わせ手話通訳がつくことも多い。わたしは長年手話通訳者として、さまざまな場面で通訳をしてきた。

手話は、日本語とは異なる言語であり、文法も異なる。日本語が音声のイントネーションを用いるように手話では視線や眉の動き、うなずきなどが文法の機能をもち、語の構成も日本語とは異なる。そんな日本語を第一言語とするろう者と、日本語を第一言語とする聴者の言語を、双方の文化の違いも踏まえながら通訳をしていくのだ。

遅口も困る

正直、これまでいつもすっきり仕事を成し遂げられたというわけではない。例えば、日本語ならではの言い回しに苦慮することもある。「子どもが母親に手紙を書いた」と聞いて、手紙は送ったのか、書いたけど渡していないのか？ 講演会ではその場で講師に聞くこともできず、悶々^{もんもん}としながら通訳をすることもある。同音異義語も難しい。「ミンパク」は民博なのか民泊なのか、ダジャレなんぞ言われた日には……手話通訳者への試練と腹をくくって、いどむしかない。

あと、通訳をしていて困るのが、講師の早口ならぬ遅口。前述のとおり手話と日本語は異なる言語で

あるので、同時通訳といっても日本語の意味を理解してからでないと手話には訳せない。しかし、手話通訳に気を遣ってか、講師にゆっくり話されてしまうと、文の最後まで待たないと訳せないという状況がおきてしまう。速くても意味のわかりやすい話であれば、訳しやすいのだ。

ろう者はおもに手話通訳者に目を向けているので、講師がスライドを指示しながら話し出すと「スライドも見てもらいたいけど、通訳を見ないといけないよね」ってことで対応に苦慮したり、スライドを見せようと部屋を暗くすると「通訳が見えませーん」ってことも。そんな状況を頭に入れておいてもらうためにも、講師との打ち合わせは重要である。これからも、講師や主催者と協働で、魅力的なイベントに誰もがアクセスできる環境を目指し、精進する日々である。



みんぱく公開講演会で手話通訳をする筆者（大阪市、2025年）

おしゃべりバスは行く

福井 栄二 郎ふくい えいじ ちやう

島根大学 准教授

わたしの子どもが小学校に入学してすぐのこと。市の交通局の担当者が学校に来て「バスの乗り方講座」というものを開催したらしい。乗降の仕方、ICカードの使い方、座席の座り方など。もちろん「大きな声でおしゃべりしない、騒がない」というのは何度も念押しされたことだろう。

わたしが調査しているヴァヌアツの首都



乗客を待つバス。市民の足として欠かせない(2014年)
(写真はどちらもヴァヌアツ ポートヴィラ)

ポートヴィラにも、小型バンの乗り合いバスが走っている。ただし

日本のように決められた路線を定時運行するものではない。乗る際には道路で手を挙げて運転手に行き先を告げ、方向が合えば乗せて行ってくれる。料金は市内であれば一五〇ヴァツ(約二〇〇円)。坂の多いポートヴィラでは、このバスはまさに「市民の足」となっている。

わたしもポートヴィラ滞在時はこのバスをよく使う。首都中心部だとバス自体はひっきりなしに走っているのだが、どれを捕まえてもよいわけではなく、ちよつとしたコツがある。とくに重要なのが乗客の数だ。定員ギリギリのバスに乗り込んでしまふと、それだけ到着も遅くなる。奥まった生活道路を長時間走り続けたり、自分より後に乗車した人が先に降りたりすると、「本当にたどり着けるかな」とか「運転手はわ



乗ったバスで知人と十数年ぶりの再会。思わず車内で記念撮影(2018年)

たしのことを覚えていけるかな」と不安な気持ちになる。だから向こうから走ってくるバスをあらかじめよく見て、車内にどれくらいかの乗客がいるのかを瞬時に確認する必要がある。

もちろん楽しみもある。ポートヴィラは小さな街なので、バスでよく知り合いに出くわす。車中でおしゃべりに花が咲き、会話に見知らぬ誰かが入り込んでくることもしばしば。そこでは、週末のイベント情報から市場の品揃えしなぞろ、そして誰と誰が付き合っているという恋愛事情までさまざまな情報が行き交う。その真偽はともかく、わたしも運転手さんからいろんな噂話うわさを教えてもらった。

わたしたちはバスを公共空間だととらえている。もちろんヴァヌアツでもそうなのだが、同時に少々賑やかなコミュニケーションの場でもある。「お行儀よく」と口酸っぱく教えられたウチの子どもが乗ったら混乱するだろうか。

わたしって調査しているのか

マーク・ウィンチェスター 民博助教



日本語で書く

このコーナーの執筆依頼を受けたとき、まず頭に浮かんだのはこの間だった。わたしは人類学者ではないし、特定の土地に長期滞在して観察や聞き取りをおこなうような調査

もしていない。資料を探して図書館へ行くことや、関係者に話を聞きに出向くことはあるが、それも近況報告や雑談、食事をともにする程度で、「調査」とよぶにはおおげさだ。そもそもわたしは、「調査研究」ということばにどこか抵抗を感じてきた。情報や語りを

「資源」として引き出し、

持ち帰るような植民地主義的構造をはらんでいるからである。かつて自分が学んだ日本研究でも、研究者が短期滞在して数回インタビューをおこない、帰国後に論文を書いてその地には二度とあらわれない——そうした実

践への違和感が拭えない。わたしはアイヌの歴史・文学・芸術・政治に関する研究において、その人自身が名を記して発表したことばや作品に焦点を当て、それが現代にもつ意味を考えると、それがアイヌの出自をもつ多くの人びとに届く日本語で書くとしていく。

開拓モノUMENTを巡る

最近の論考では、一九六八年にはじまった北海道百年記念事業を通じて形成された、明治政府主導の開拓を一方的に肯定する歴史像——かつては「官製史観」として批判されたそれが、近年では「先人の開拓史が消される」という声とともに擁護されるようになったという、ある種



黒田清隆之像



開拓記念碑

漁民之像。漁民の功を讃えるため、北海道漁協婦人連絡協議会創立10周年と北海道100年を記念して建立された(写真はすべて札幌市、2022年)



一九七〇年に建てられた同塔の近年の解体をめぐる言説などを手がかりにした。その下調べのような気持ちで、札幌市内の開拓関連モニュメントを一日でどれだけ巡れるかを試してみた。札幌建設の地碑、札幌農学校演武場跡碑、開拓記念碑、漁民之像、開拓使長官を務めた黒田清隆像と開拓使教師兼顧問のホーレス・ケ

ワイン・ダン記念館など、かなり歩き回った。わたしは、こうした記念碑が一日ではとても巡りきれないほど多く存在していることに、あらためて驚かされた。にもかかわらず、「開拓史が消される」という一部の声があることに、その非現実性を痛感した。先住民としてのアイヌの承認、そしてそれに伴う教育や差別解消に向けた長年の取り組みが、歴史を「消す」とされる——まるでその歴

史が和人だけのものともいうかのように。

植民地主義の遺産

エドウィン・ダン記念館を訪れた際、ちよつとした出会いがあった。記念館に隣接する公園には、開拓使に雇われ、「エゾオオカミを絶滅させた男」としても知られ、北海道の植民地化に加担したダンの像が立っている。ちなみに、二〇〇八年に「アイヌ民族を先住民とすることを求める決議」が通ったときの内閣官房長官町村信孝は、ダンの事業を継いだ人物の孫であり、百年記念事業のころに北海道知事を務めた町村金五のご子息でもある。



琴似屯田兵村兵屋跡



エドウィン・ダン顕彰像

像の周囲を掃除していた年配の男性は、白人であるわたしが(アメリカではなく)イギリス出身と知るとやや残念そうだったが、「ダンの貢献を大切に思う若者がいてうれし

い」と話した。わたしは研究の内容には触れなかった。こうした一見ささやかなやりとりは、しばしば出会いのものであり、記念碑や記念館という場に漂う、植民地主義の重層的なアイロニーを浮かび上がらせる。そしてその空気の中のことばを交わすわたしは、やはりどこであつても「調査」という行為の只中にいるのだと、あらためて感じさせられる。

の反動的な逆転現象を読み解いた。

戸塚美波子による、北海道百年記念塔をめぐる批判的な詩「一九七三年ある日ある時に」(一九七三年)や、

テヘランでラーメンロスを克服!?

たに けんいち
谷 憲一 民博 特別研究員

ラーメンが恋しい——しかし、イランにはない。そんなラーメン好きのわたしは、フィールドワーク中にキャレ・パーチェという料理に出会った。麺こそ入っていないものの、スープの濃厚さはこってり系ラーメンにも負けていない。

キャレ・パーチェとは「頭(と)足」のこと。その名のとおり、羊の頭と足を長時間煮込んだ料理である。匂い消しのため、タマネギやショウガのほか、ターメリックやシナモンなどのスパイスとともに8時間も煮込む。店では、ほぼ肉、目、舌、脳みそ、足などの部位を個別に注文する。脂とコラーゲンたっぷりの濃厚なスープが必ずついてくる。

卓上の塩でスープの味を調整し、小石の上で焼いたサンギャクとよばれるナーン(パン)をちぎってスープにぶち込み、スプーンですくって食べる。各部位にも塩を振ってナーンと一緒に食べる。口のなかが脂でギトギトするのが気になったら、卓上にある酢やレモン汁を加えるとさっぱりする。食後の紅茶で胃を落ち着かせれば、パワーみなぎる一日のはじまりである。

朝食食べることが多いため、「タバーヒー」とよばれるキャレ・パーチェ屋も朝早くから店を開けている。早めに行かないと人気の部位が売り切れることもある。友人の家に泊まったときに、朝食として出してもらったこともあった。

あるとき、いつも通っていた肉屋のショーケースに羊の頭が売られており、キャレ・パーチェを自分で作ってみようと思い立った。頭をガスコンロ

で^{あぶ}炙り、残った毛を燃やす。そして大きな鍋で、弱火で一晩かけて煮込んだ。朝になると白濁スープに浸かった頭部がホロホロになっていた。みじん切りのニンニクを薬味に加えると、予想どおり、羊の脂とよく合うのだった。

日本に戻ってきた今ラーメンのスープを飲むと、あのホロホロに煮込まれた羊頭の味こそが恋しい。



テヘラン市内ラーレ公園前の店ですべての部位を注文。お気に入りは脳みそ



キャレ・パーチェを提供する店は「タバーヒー」といい、スィーラービーという羊のモツ煮込みも提供することがある
(写真はどちらもイラン テヘラン、2013年)

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 山中由里子
編集委員 樫永真佐夫(編集長) 河西瑛里子
黒田賢治 中川理 奈良雅史 松本雄一
制作・協力 公益財団法人 千里文化財団
印刷 株式会社 研文社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係
にお願いします。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆油由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読のほか、友の会会員の方には毎月お届けします。

『月刊みんぱく』定期購読

本誌を1年間お届けいたします。年間をとおして、いつからでも始められます。



お問い合わせ

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するためにつくられました。本誌送付のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

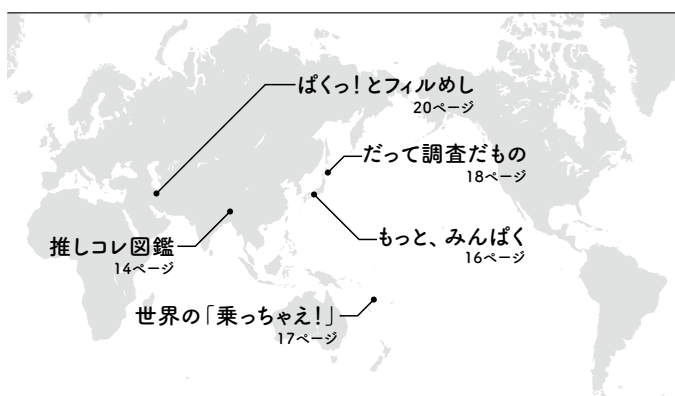
電話 06-6877-8893(平日9:00~17:00)

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/



友の会

今月号の地図



編集後記

イランでの長期フィールドワークから日本に戻ってみると羊頭肉のこつてりが恋しい、という谷憲一さんのエッセイを読んで思った。でも日本の食卓にそれをそっくりもってきて、やっぱり現地でおなじように感動できるだろうか。現地でないとしっくりこないことである。舌で味わう美は、しばしばローカルな脈絡に依存しているからである。本特集にある現代台湾原住民アートを「原郷」で展示する話に、妙に納得したのもそんなところだった。また、今や美術作品は、美術館などのハコ物のなかで鑑賞されるにとどまらず、ローカルな脈絡のなかへと引き戻されていることも感じたのであった。

ところで、原郷ってことばには、なんだかあたたかみがある。居心地の良いところ、しっくりくるところも含意していて、厳密に「もといたところ」でなくてもいいのかもしれない。

大阪・関西万博は今月閉幕。民博は、特別展、企画展ともにますます絶賛開幕中!(樫永真佐夫)



2025年8月号において誤りがありました。下記のとおり訂正いたします。

21頁「編集後記」誤)「ミャンマーの修行僧」正)「ミャンマーの修行者」

次号の予告 11月号

特集「星を見あげる」(仮)



国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

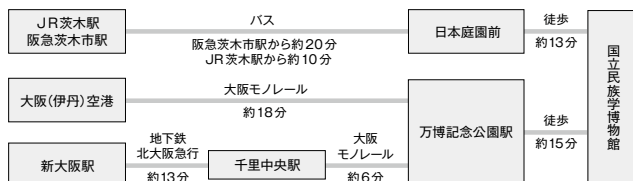
開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は直後の平日)
年末年始(12月28日~1月4日)

観覧料 一般 780円/大学生 340円/高校生以下 無料
特別展の観覧料金は、その都度、別に定めます。
※観覧料割引についてはホームページでご確認ください。

主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>



日本×ウズベキスタン共同調査隊が発掘

シルクロードの至宝 日本初公開！

クラウドファンディング挑戦中

カフィル・カラ遺跡

支援募集期間 9月16日(火)10時～11月17日(月)23時

目標金額 400万円



シャフリスタン地区 発掘調査風景



木彫板 発掘時の様子



木彫板 全体 出土直後

1000年以上前の火災をくぐり抜けた「奇跡の木彫板」。シルクロードのロマンを、日本へ。いま、遠いウズベキスタンの世界遺産「カフィル・カラ遺跡」から、日本人を含む調査隊が発掘した貴重な考古遺物を国立民族学博物館で展示しようとしています。火災に遭い焼けて炭化したからこそ腐らず現代まで残っていた「木彫板」は、私たちに、古代の人々の豊かな創造力や、遠い異国の文化を語りかけてくれています。

写真では決して伝わらない、本物だからこそ伝わる歴史の息吹を、日本の皆様にも実際にその目で見ていただきたい。「木彫板」は、ルーブル美術館、大英博物館では展示されましたが、大きな輸送費がネックとなり、まだ日本には一度もやってきていません※。今回のクラウドファンディングは、「木彫板」を含む貴重な出土品の日本への輸送費を集めるための挑戦です。

日本人が発掘に関わった、シルクロードのロマンをみんばくへ。

皆様からの温かいご支援、心よりお待ちしております。



木彫板 女神ナナ頭部

画像提供：日本・ウズベキスタン共同調査隊

あきんど
特別展「シルクロードの商人語りーサマルカンドの遺跡とユーラシア交流ー」2026.3.19-6.2

※当館調べ 調査時期：2025年9月 調査方法：ウズベキスタン共和国芸術文化振興基金への直接照会

いただくご寄付の使い道

展示物の輸送費



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立民族学博物館
National Museum of Ethnology



READY FOR

ご支援・詳細は
WEB サイトをご覧ください
<https://readyfor.jp/projects/akindo-gatari>
国立民族学博物館 レディーフォー

